

「セミナー」活用法・その2(一般教養)

企業経営漫談士 岡野実空

「セミナー」活用法の後半は、「一般教養」編。それは「自然科学」と「社会科学」に、人間文化を対象とする「人文科学」を加えた3つの領域で、「経営」を考える基礎となるもの。それらを基に、「事業力」と「人間力」の強化を求められるミドルの皆さんのために、今回はその学習法と「セミナー」活用術をお伝えします。

その1: 学習の意義

組織のミドルとして、まず「認識」しておかなければならないのは、「一般教養」を学ぶ真の「意義」。それは「経営」を考える基礎としてばかりでなく、本質的な「違い」を思考し、社会から選ばれるためであることまで理解している人はごく稀です。また自分の優秀性を見せつけるためだけの「博識」は、「組織」にとって、百害あって一利なし。それが求めるものは、各分野の「目利き」たちの相乗効果が生む、他が模倣しづらい「体系知」だからです。

とはいえ、その学習の基本は「独学」。続いては、それが独善に陥らないための「共学」です。その一連の過程は、「知識」の裾野を広げるだけでなく、「組織」が目指す頂点を押し上げ、そこに至る多様なルートを開発してくれるのです。

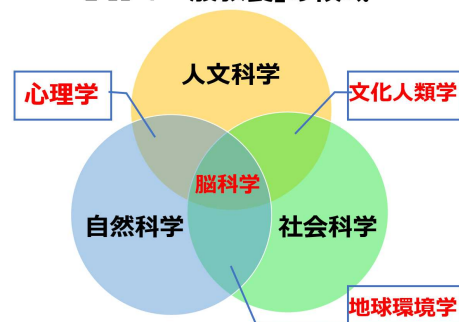
その2: 学習分野と方法

さて各自が担当する「分野」で、決して欠かすことができないのは、実はよく理解できていなかった基礎部分の発見や、更新された重要な知識の継続学習。その地道な積み重ねは、自らの言動に確信と着着きを与えてくれます。

その一方、「共学」分野の入口としては、各出版社が鎔を削る「新書」が最適。それらは社会人に必要な3領域の大半をカバーしているばかりか、かつては単行本でしか得られなかった各専門書の「体系知」を、わずかな費用で入手可能にしてくれました。またそこに提示された参考文献は、その分野の貴重な図書案内であり、その後の学習の道標ともなります。従って、選択に迷ったら、それが充実した「新書」を選ぶのが鉄則です。

さらに今回特に強調したいのは、上記3領域の「汽水域」にある分野の学習。具体的には、近年急速に進歩した「心理学」や、グローバル化に伴う「文化人類学」、そして風雲急を告げる「地球環境学」などです。そして、それらの広範な「知識」を、今後の具体的な「行動」へと導いてくれる「脳科学」は、いまやミドル必須の学習分野となっています。

Z-11 「一般教養」の領域



その3: セミナーの活用

ところで「一般教養」に関して、新たな「知見」が獲得できそうな外部の「セミナー」には、組織メンバーで分担し、積極的に参加しましょう。その準備から報告までの要領は、前回の「経営」編と基本的に同じです。しかしその内容の「普遍性」や「汎用性」が、後工程に違いを生みます。

もしそれを強く感じたら、単なる「報告書」に止まらず、社内での「報告会」を行いましょう。また反応によっては、社内開催を企画します。その際、幹事としての経験やエネルギーは、「3つのワーク」で必ず報われることを保証します。

因みに、これまでに参加、あるいは関与した数多の「セミナー」。その講師であったさまざまな専門家の著書を読み返すとき、自ら幹事を務めた方々の肉声が聞こえ、行間が読めるのは、その役得の証。また NPO 設立後、メンバーの一人、一カ氏主催のサロン、「創発倶楽部」を積極的に支援していたのも、それをすでに体感していたからです。

さて「経営」、「一般教養」編と、2回に分け取り上げた、我が「セミナー」活用法。もしどちらか選べと言われたら、答えは、もちろん後者。理由は、「すぐに役立つものは、すぐに役に立たなくなる」(小泉信三)からです。

2021年3月8日 実空

☞『ミツな経営』E-10 「文理融合」への道程